

病害虫発生予察情報(9月予報)

令和7年8月26日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	いもち病 (穂いもち)	発生量：少 (発病株率 0.1%)	8月中旬の葉いもち発生量：やや多 (+) 8月中旬の穂いもち発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：少ない (-)
	紋枯病	発生量：少 (発病株率 11.3%)	8月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (-)
	トビイロウンカ	発生量：少 (寄生数 0.7頭/株)	8月中旬発生量：少(発生なし) (-) 8月の成虫誘殺数：少(誘殺なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	斑点米カメムシ類	発生量：多	8月中旬発生量：多 (+) 8月の成虫誘殺数：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	コブノメイガ	発生量：やや少 (被害株率 6.2%)	8月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
温州みかん	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.07)	8月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (-)
	黒点病	発生量：多 (発病度 1.7)	8月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (-)
	ミカンハダニ	発生量：並 ただし、東部：多 (寄生葉率 1.6%)	8月中旬発生量：やや少 (-) ただし、東部：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：少ない (+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (寄生果率 0.1%)	8月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.6)	8月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (-)
かき	ハマキムシ類	発生量：やや少 (被害葉率 0.9%)	8月中旬発生量：少 (-) フェロントラップ誘殺数：並~やや少(±~-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (±)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
果樹全般	果樹カメムシ類	飛来数：やや少 ただし、一部で早期飛来に注意	予察灯誘殺数：少 (－) フェロモントラップ誘殺数：並 (±) ヒノキ着果量：少 (－) ヒノキ寄生数：やや少 (－) ヒノキ球果吸汁痕数：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
茶	炭疽病	発生量：少 (病葉数 28.4 葉/1.25m ²)	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：少ない (－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (叩き落とし虫数 5.0 頭/4カ所)	8月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 1.1 頭/4カ所)	8月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	チャノホソガ	発生量：やや少 (巻葉数 1.0 葉/1.25 m ²)	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：少ない (+)
	ヨモギエダシャク	発生量：多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4カ所)	8月中旬発生量：多 (+) 予察灯誘殺数：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	カンザワハダニ	発生量：やや多 (寄生葉率 2.3%)	8月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：並 (寄生株率 1.3%) 発生時期：やや早い	8月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：少ない (+)
ねぎ (白ねぎ)	疫病	発生量：少 (発病株率 1.0%)	8月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：少ない (－)
	黒斑病・葉枯病	発生量：並 (発病株率 4.5%)	8月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：少ない (－)
	シロイチモジヨト ウ	発生量：多 (寄生株率 1.6%)	8月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率 36.8%)	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率 8.8%)	8月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：少ない (+)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	炭疽病	発生量：並 (10月発病株率 2.0%)	8月上中旬発生量：少 (－) 防除員からの報告：並～多 (±～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：少ない (－)
	うどんこ病	発生量：少 (10月発病株率 0.7%)	8月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：少ない (±)
	ハダニ類	発生量：多 (10月寄生株率 11.6%)	8月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：少ない (＋)
	アブラムシ類	発生量：多 (10月寄生株率 4.4%)	8月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：少ない (＋)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (10月寄生株率 0.8%)	8月上中旬発生量：少 (－) 8月誘殺数：少～多 (－～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：少ない (±)
作物全般	オオタバコガ	発生量：多	フェロモントラップ誘殺数：少～多 (－～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：少ない (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害
虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos-higoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時（調査期間：8月14～20日）の生育は早期栽培が概ね乳熟期～成熟期、普通期栽培が概ね出穂期～糊熟期であった。病虫害防除員からのアンケート調査によると、生育は平年並から早い傾向。

●いもち病（穂いもち）

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、県全体の葉いもちの平均発病株率は3.9%（平年2.3%）と平年よりやや多かった。
- ・8月中旬の巡回調査では、穂いもちの発病は確認されなかった（平年発病株率0.04%）。
- ・本病は葉いもちを主要な伝染源とし、出穂以降、穂の各部に付着した病原菌により発病する。低温および降雨は本病の発生を助長する。1か月予報では、降水量は平年より少なく、気温も平年より高いため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・葉いもちの急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・現在、上位葉に発生している葉いもちは、穂いもちの発生を助長する。そのため、葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの防除を適期（穂ばらみ期～穂揃期）に2回行う。
- ・さらに多発が予想される場合は傾穂期に追加防除を行う。
- ・常発地では適期に薬剤の予防散布を行う。
- ・近年、他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は[日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページ「殺菌剤使用ガイドライン」](#)を参照。

●紋枯病

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.7%（平年6.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量が平年より少ないため、本病の発生を助長しない（本病は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合は速やかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年0.05頭/株）。
- ・県内4か所の予察灯のトビイロウンカの誘殺は確認されなかった。なお、誘殺数データは静岡県病虫害

防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。

- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、増殖が助長される気象条件である。

防除対策

- ・巡回調査および予察灯では本種の発生は確認されていないが、場所によっては飛来している可能性があるため、ほ場をよく観察し、今後の発生に注意する。
- ・9月の気温が高い場合には急増することがあるので注意する。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（イネカメムシ、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・8月中旬の水田におけるすくい取り調査では、平均捕獲数は2.5頭/30回振り（平年1.5頭）と平年より多かった。地域別では、東部高冷地および志太榛原地域では平年より多く、田方平坦地および中遠早期・普通期地域では、平年よりやや少～少なかった。
- ・県内4か所の予察灯における7月15日～8月10日の斑点米カメムシ類の合計誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。ただし、アカスジカスミカメの誘殺数は平年より多く推移している。なお、誘殺数データは静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・出穂後は、水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・斑点米カメムシ類（イネカメムシを除く）に対する薬剤散布は、成虫侵入期となる穂揃期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態）とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回行うと防除効果が高い。
- ・イネカメムシに対する薬剤散布は、不稔対策として成虫侵入期となる出穂期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態）と斑点米対策として出穂期から7～10日後（幼虫ふ化期）に薬剤散布を行うと防除効果が高い。
- ・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤については、[静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準](#)を参照する。
- ・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は[農林水産省ホームページ](#)を参照する。

●コブノメイガ

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、平均被害株率は1.0%（平年2.4%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・出穂期頃の水稻が加害されると登熟歩合が低下するので、成幼虫の発生状況を確認し、必要に応じて薬剤散布を行う。

【温州みかん】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育状況はばらついているが（数日遅い～数日早い）、平年並の地域が多い。果実の肥大は平年並～やや良い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.4（平年0.03）、葉の発病度は0.9（平年0.2）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

- ・ 温州みかんは中晩柑類に比べて本病に感染しにくいとされているが、昨年から多発が続いている。
- ・ 本病は風雨により伝染する。台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・ 発病枝は伝染源となるため除去する。発病した夏秋枝は特に除去する。
- ・ ミカンハモグリガの被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣や防風網の整備など防風対策をする。
- ・ 防除対策については「[令和7年度技術情報第1号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）](#)」も参照する。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均発病度は3.3（平年1.5）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 20～27℃の水滴中で孢子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出来る。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
- ・ 伝染源となる枯枝が高温少雨で増えている。枯枝は除去し、園内や周囲には放置しない。
- ・ 防除実施日以降の累積降水量が250mm、または防除実施日から25～30日経過した時点が次の防除実施の目安となる。アメダスなどの気象データを確認し、栽培地域の累積降水量が増えた場合は防除を早めて実施する。
- ・ 9月以降の後期感染を防止するため、降雨の前など、適宜防除を実施する。ただし、早生品種の防除は収穫前日数に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は3.4%（平年5.7%）と平年よりやや少なかった。ただし、地域別では、東部地域で7.8%（平年6.0%）、中部地域で0.6%（平年7.8%）、西部地域で1.7%（平年3.4%）と東部地域での発生がやや多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、平均寄生果率0.3%（平年0.1%）、果梗部被害度1.1（平年0.7）、果頂部被害度0.5（平年0.1）と、平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アメダス気象データを用いた予測によると、今後の気温が平年並で推移した場合、第6世代成虫の発生ピークは8月16日～9月2日（既にピークを迎えた産地もある）、第7世代成虫の発生ピークは9月2日～25日、第8世代成虫の発生ピークは9月22日～10月29日と予想される（昨年より数日遅い。産地により発生時期が異なる）。なお、今後の気温が平年より高く推移した場合、各世代成虫発生ピークは早まるため注意する。
- ・産地ごとの詳細な防除時期は、病害虫防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」を参照する。
- ・本種各世代において、飛来最盛日の1週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
- ・普通温州みかん園では寄生果率10%以上を目安に防除を行う。
- ・防除対策については「[令和7年度注意報第2号（かんきつ チャノキイロアザミウマ）](#)」も参照する。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は1.0（平年0.6）、葉の発病度は1.6（平年0.5）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

- ・本病は風雨により伝染する。台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・発病枝は伝染源となるため除去する。発病した夏秋枝は特に除去する。
- ・ミカンハモグリガの被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。
- ・風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣や防風網の整備など防風対策をする。
- ・防除対策については「[令和7年度技術情報第1号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）](#)」も参照する。

【かき】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育は地域によりばらついているが、果実の肥大は平年並である。

●ハマキムシ類

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では本種による被害は認められなかった（平年被害葉率0.5%）。
- ・ 浜松市内のフェロモントラップにおける8月の誘殺数は、平年並～やや少なくて推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より少なく、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける成虫の誘殺状況に注意し、適期に防除する。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) を参照する。

<その他の病害虫>

●フジヨナカイガラムシ

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生果率は0.4%（平年0.8%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 本種は果実とへたの間に寄生しており薬剤が届きにくいいため、丁寧に散布を行う。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 県内4か所の予察灯における8月1～15日の合計誘殺数の平均は、125頭（平年318頭）と平年より少なかった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが93.8頭（平年176頭）、ツヤアオカメムシが9.3頭（平年67.2頭）、クサギカメムシが22.0頭（平年74.9頭）であった。
- ・ 県内6か所のフェロモントラップにおける8月1～15日の合計誘殺数の平均は、110頭（平年96.9頭）と平年並だった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが90.3頭（平年94.3頭）、ツヤアオカメムシが14.7頭（平年1.0頭）、クサギカメムシが4.8頭（平年1.6頭）であった。
- ・ ヒノキ球果の着果量（指数）は、県平均1.9（平年4.9）と平年より少なかった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が少ないと新成虫の増殖は抑制される。
- ・ 8月中旬のヒノキ球果における平均寄生数は、10結果枝あたり2.7頭（平年4.1頭）と平年よりやや少なかった。地域別では、東部地域で3.8頭、中部地域で寄生なし、西部地域で3.4頭と寄生状況が異なっていた。
- ・ 8月中旬のヒノキ球果における本虫の平均吸汁痕数/球果は13.6（平年10.8）と平年よりやや多かった。なお、本県ではヒノキ球果における吸汁痕数が20に近づくと、本虫がヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。8月中旬時点では調査地点の2割（東部・西部地域が多い）で平均吸汁痕数が20を超えており、既に餌を求めてヒノキからの離脱が始まっていると考えられる。
- ・ 8月中旬の温州みかん及びかき巡回調査では、果樹園への飛来は認められなかったが、西部地域の一部では本虫の飛来を確認したとの情報も寄せられている。
- ・ 以上をまとめると、平年に比べて、予察灯への誘殺数は少なく、フェロモントラップへの誘殺数は平年並、ヒノキ着果量は少なく、ヒノキでの寄生数はやや少なく、ヒノキ球果での吸汁痕数はやや多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より少なく、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

- ・1か月予報を加味すると、9月の果樹園への成虫の飛来は助長されるが、本年は本虫の餌となるヒノキ球果が少ないことから、新成虫の増殖も抑制されるとともに、飛来数も平年よりやや少ないと予想される。ただし、球果での吸汁痕数はやや多いことから、一部地域では早期飛来も想定される。

防除対策

- ・ヒノキ球果での本虫吸汁痕数をもとにした予測式（堤、2003）によるヒノキからの離脱予測日（果樹園への飛来予測日）は、9月3～6日頃（地域により異なる）と予想される。ただし、吸汁痕数が最も多い地点での飛来予測日は8月26日頃と予想される。また、ヒノキ球果を吸い尽くすと、新たな餌を求めて果樹園へ予測よりも早期に飛来する可能性もあるため注意する。
- ・静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、ほ場の見回りをこまめに行う。ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、周辺ほ場への大量飛来がみられた場合、飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。なお、本虫の移動範囲は広いと、地域での一斉防除が効果的である。また、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合がありますので注意する。
- ・薬剤防除については、静岡県病虫害防除所による「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- ・防除対策については、「[令和6年度注意報第6号（かんきつ、びわ、落葉果樹 果樹カメムシ類）](#)」も参照する。

【茶】

<生育の概況等>

秋芽の生育状況は萌芽前～開葉期と、茶園の管理によりばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は3.1葉/1.25㎡（平年22.2葉/1.25㎡）と平年よりも少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（分生子の発芽適温 22～27℃）。

防除対策

- ・本病の感染には、新芽生育期に降雨による胞子の飛散と10時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ20日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早め（萌芽期～2葉期）に防除を行う。秋冬番茶を摘採する茶園で伝染源が多いほ場では、速やかに有効期間が長い浸透性殺菌剤を散布する。一方、生育中期以降に降雨があった場合は、たとえ感染しても秋冬番茶の摘採で新芽の上部は症状が出る前に刈られるので、防除の必要はない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は21.2頭/4か所（平年10.7頭/4か所）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.0頭/4か所（平年0.8頭/4か所）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.2葉/1.25㎡（平年1.0葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.4頭/4か所（平年0.1頭/4か所）と平年より多かった。
- ・ 茶業研究センターの予察灯における7.1～8.3半旬の誘殺状況は、平年よりも多く推移している。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 茶園内で局所的に発生するので茶園をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。
- ・ 若齢幼虫は若葉を好むため、食害の有無をよく観察し早期発見に努める。また、樹木や電柱、小屋、放置した資材などに産卵するので、これらの近くでは特に発生に注意する。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、樹冠面の平均寄生葉率は5.1%（平年4.3%）と平年並だった。
- ・ 本種の天敵であるカブリダニ類の平均叩き落とし数は、3.5頭/4か所（平年0.6頭/4か所）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園や、発生の認められている茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択して防除を行う。
- ・ 降雨が少ない状況が続いているため、現在発生のみられない茶園でも発生に注意し、早期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.6%（平年4.8%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生をやや助長する。
- ・ アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、8月26日の計算によると平年より4日早い9月6日と予想される。

防除対策

- ・ アメダス地点の予想ふ化最盛日については、静岡県病害虫防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」で提供している。これを参考に各地の茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。なお、7月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

<その他の病害虫>

●褐色円星病

- ・ 本病は、春先になって落葉が始まってからの防除では効果がない。一番茶摘採期に発生の多かった茶園や二番茶残葉に緑斑症状が多数見られる茶園では、秋芽の生育期～硬化期に必ず1～2回防除する。

●赤焼病

- ・ つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝や茎葉内に病原細菌が残存して越冬している。この菌が秋以降、台風の影響による傷などで増殖し、冬の発病につながるため、台風の通過前後に薬剤散布を実施し、菌密度を下げしておく。

●チャノホコリダニ

- ・ 8月中旬～9月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

【ねぎ】

<生育の概況等>

生育は平年並で推移している。

●疫病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.04%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（病原菌生育適温28～30℃）。

防除対策

- ・ 多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。
- ・ 窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均発病株率は4.2%（平年2.9%）と平年よりもやや多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。
- ・ 風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除に努める。
- ・ 薬剤防除は、予防散布または発病初期の防除に努める。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率2.2%（平年1.5%）と平年よりもやや多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 例年9月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。
- ・ すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.2%（平年25.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 近年、食害が激しい新系統の発生により、葉が真っ白になる被害が散見されている。多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率27.2%（平年19.1%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。
- ・ 本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類への伝染源となるため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

【いちご】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、苗の生育は平年並～やや遅く推移している。

●炭疽病

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年1.8%）と平年より少なかった。ただし、巡回ほ場では発病が疑われる株の抜き取りが進んでおり、いちご病害虫防除員6名から本病の発生が平年並～多いと回答があったため、注意する。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。
- ・発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、頭上かん水は避け、株元かん水など水の跳ね返りを防ぐ形でかん水を行う。
- ・薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。感受性低下の疑われる剤（MBC殺菌剤（FRAC:1）、QoI殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤抵抗性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～11）を使用する。
- ・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後は重点的に防除を行う。
- ・発病株や発病が疑われる株は定植苗には使用せず、病原を本ほへ持ち込まない。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.1%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であるため高温期の発病は抑制される。そのため本病の発生が停滞、終息したように見えるが、最高気温が30℃を下回りだすと再び発生が増加するため注意する。
- ・6～7月に発生がみられたほ場では薬剤散布による予防を継続し、発病葉の除去を行う。無病苗の定植に努め、病原を本ほへ持ち込まないよう注意する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、平均寄生株率は16.5%（平年8.0%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少なく、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・育苗期の防除を徹底し、ハダニ類を本ほへ持ち込まないよう注意する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、平均寄生株率は14.8%（平年5.0%）と平年より多かった。地域別では、東部で11.6%（平年3.5%）、中部で5.7%（平年7.4%）、中遠で25.3%（平年4.3%）と東部及び中遠での発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より少なく、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 初期防除に努め、アブラムシ類を本ぼへ持ち込まないよう注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・ フェロモントラップにおける7～8月の誘殺数は、磐田市では平年より少なく推移しているが、静岡市及び御前崎市では平年並～多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より少なく、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し、若齢のうちに防除する。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

<その他の病害虫>

●コガネムシ類

- ・ 県内3か所の予察灯における8月の誘殺数は、平年並～多く推移している。
- ・ 成虫が苗床に産卵し、その幼虫が根を食害することで生育が妨げられて欠株となる。ポット育苗時や本ぼ定植前等に幼虫を対象として薬剤防除を実施する。
- ・ 定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ぼへ幼虫を持ち込まないよう注意する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 県内3カ所のフェロモントラップにおける7月11日～8月10日の誘殺数は磐田市富丘では平年より多く推移しており、浜松市中央区協和町では平年並、伊左地町では平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下する。そのため、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和7年8月22日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 8月23日から9月22日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		向こう1か月は気温の高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。また、期間の前半は降水量の少ない状態が続くでしょう。
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	降水量	降水量は、少ない確率50%です。
	日照時間	日照時間は、多い確率60%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率60%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	50	30	20
1か月	日照時間	10	30	60
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	10	30	60

【予報の対象期間】

1か月	:	8月23日(土)～	9月22日(月)
1週目	:	8月23日(土)～	8月29日(金)
2週目	:	8月30日(土)～	9月5日(金)
3～4週目	:	9月6日(土)～	9月19日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>